に関する共同プロジェクトがある。この研究では現場の従業員を中心に，会社・組合・作業集団へのコミットメントの相互依存関係が問題とされている。現在，日米比較の視点からデータの分析が進行中である。第6として，石田科学経済研究財団からの研究助成を受けた「わが国産業組織における管理職のキャリア形成に関する実証的研究」が進行中である。この研究では，愛知県下のいくつかの企業で働く管理職を対象に，キャリア形成の規定要因とキャリア形成パターンの究明が試られている。第7として，「職場のリーダーシップと仕事のやりがい」と題したリーダーシップ研究がある。この研究では，民間企業・愛知県職員・大学生のクラブ活動を中心に質問紙によるデータが収集され，目下分析が進行中である。リーダシップ次元としては，リーダーの部下一人一人への働きかけ（個人志向）と，集団全体への働きかけ（集団志向）の2つに焦点が当てられている。

2. 執筆活動

女子短大生の職業意識に関する研究は，後藤宗理・鹿内啓子先生との共同論文として，本紀要にまとめられた。また，愛知県婦人労働サービスセンターでの調査結果をもとに，民間企業における婦人管理・監督職のキャリア形成に関し，冨安玲子・湯川隆子先生との共同でやはり本紀要に論文としてまとめられた。なお，県サービスセンターでの仕事は冨安・湯川先生との共同執筆で2つの報告書としてまとめられた。その一つはインタビュー調査に基づいて執筆された「婦人の管理・監督職に関する研究――キャリア形成に関する面接調査」であり，第2は「婦人労働力の管理と育成に関する調査―民間企業における実態と管理者の意識」である。加えて，これらの研究結果の要約は「民間企業における婦人管理・監督職の地位形成」と題して，「あいちの労働経済」(№30)に掲載された。先のJapan-US Conference での発表は，原稿を修正したものが，同ConferenceのProceedingsの論文として採用された。更にこの結果を発展させ，「The Japanese Career Progress Study : A seven-Year follow-up」と題し，シンシナティ大学のG. Graen教授との共同論文として，JAPに掲載がきまった。リーダーシップ研究の結果は，一部「行政組織におけるリーダーシップ」と題して「職員あいち」(№38)に発表されたが，本格的なまとめはこれからである。昨年来の「経営の心理」(佐野守先生との共編，福村出版)がようやく今秋出版のはこびとなった。なお，今までの女性と職業に関する研究をまとめる形で，「女性の自立と社会進出」(仮)(福村出版)の編集作業が進行中である。

(昭和58年8月31日記)

研　究　経　過　報　告

池　田　博　和

1. 永年とりくんできた青年期の「病理と心理療法」論について，残念ながら未だ十分に体系だてて理論化できるまでには思索がねれていない。これまでに公表できたのは，その体系の一契機となる，いわば各論の一々にすぎないものであるが，そのようなものとしては次の二・三があげられる。

1）村上英治教授，渡辺雄三氏との共編になる『心理臨床家――病院臨床の実践――』(誠信書房，1982)に「ある青年期危機症例の心理療法過程」と題する一章を執筆した。この症例は「自明性の喪失」と頻繁な自殺企図とを主訴とした「分裂病性反応」ともいいうる女性であるが，その心理療法過程を追うなかで，「支持」的であることが即「受容」となりうるような絶対的受容の姿勢が治療的態度として重要であることを強調した。

2）「青年期危機への現存在分析的接近」(村瀬孝雄編『講座・心理療法の実際8，青年期危機』福村出版)この原稿自体は，すでに数年前に脱稿したものであるが，ようやく校正を終えることができたので，この秋には刊行される予定である。ここでは，重症強迫神経症の症例を通して，心理療法の諸接近のなかでも「現存在分析」的な立場の特質について述べた。

3）昨年度の本紀要には，田畑治助教授ほかとの共同研究として「臨床青年心理学研究X，青年期治療の内的視点」をまとめることができた。このなかでは，さきにあげた絶対的受容ということと治療者役割行動の具体的なありようとの関係についてふれておいた。

4）「臨床青年心理学研究」第Ⅷ報以来，懸案となっていた対人恐怖症の問題については，多くの文献にもあたってはきたが，われわれの症例に即して十分考察し，われわれの仮説を論証できるまでには至らなかった。ちなみに，われわれの仮説とは「自己の自主性・主体性が問われる場合・状況の忌避」として対人恐怖症の本態をみなそうとするものである。

思春期やせ症論の問題についてもまた同様であった。これについては，かつてこの欄でもふれたように，「生命的存在感の自明性の喪失」（木村敏）として，その本質がみきわめられるはずであると考えている。

以上の青年期病理と心理療法論以外に関心のあるテーマとしては，次のようなものがある。

2. 「女性性の内的受容について」　この主題の出発点は臨床場面におけるものであるが，実際の研究方向としては，それに限らず，女性一般にとってその女性性の内的なひきうけの様相がどのようであるのかを問題にしていきたいと考えている。今年度より数名の院生，研究生，および外部の心理臨床家の諸君と研究会をもっているところであり，現在，質問紙による調査を開始したばかりである。

3. 最近，性的障害の問題を含め夫婦関係の問題が主訴となるケースをあいついで受けもった。このような夫婦関係の関係性の主題にも，非常に興味深いものがあるので，少しまとめることができればと思っている。

4. 「ライフ・サイクルと精神衛生」　ライフ・サイクルの各発達段階におけるその時どきの危機状況にあらわれてくる諸種の臨床像と具体的な症例を記述し，そこからむしろ普通の日常生活に焦点をあてて生の意味の深化を目ざす方向での精神衛生的考察をふす形で，ライフ・オブ・スパンを描きだすような論述をなしたいと考えている。

（昭和58年８月31日記）

研　究　経　過　報　告

二　宮　克　美

1. 個人研究について

これまで「児童の道徳的判断の発達過程」について，関心を持ち研究を続けてきたわけであるが，今一つ明確な展望を持ち得ずにきている。この状況を打開するため，再び内外の研究論文を整理しつつ読んでいる。この文献研究をしていく中で，新たな実験計画を立てようと努力しているところである。

なお，これまでの実験との関連で，児童が他者の意図をどう推測しているかについて検討を加えた。この結果の概要は，９月中旬の日本心理学会第47回大会で，「児童における意図の推測――行為者に対する好悪と行為の結果が意図の推測に及ぼす影響――」と題して発表する予定である。

昨年９月から今年８月までの間に，次の２つの論文が公刊された。

「児童の道徳的判断の発達に関する一研究――Gutkinの４段階説の発達同時性の検討――」教育心理学研究　第30巻　282－286.

「児童の道徳的判断における自己の行為の判断と他者の行為の判断の比較」心理学研究　第54巻　123－126.

2. 共同研究について

久世敏雄教授を中心として研究を進めてきた青年の社会的態度に関する縦断的研究は，最終的な検討の段階に入ってきている。今年３月には，この縦断的調査から得られたデータの基礎的資料をまとめた資料集を作成した。現在，これまで報告してきた研究では検討されていなかった分析を行うとともに個人レベルでの社会的態度の発達過程の検討に力を注いでいる。今回の紀要では，前者についての研究成果をまとめ，「『中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究』の補足分析」として報告した。

3. その他

1984年版の「児童心理学の進歩」の中の「道徳性」の章を担当することになり，現在，国内の関連論文を収集している最中である。各県の教育研究所では，具体的な教育との関連で研究が進められていると思われるが，残念ながら，そのような論文は入手が難しく苦慮している。ここ数ケ月は，この執筆に力を注ぐことになろう。

（昭和58年８月31日記）